

○沈黙の核あるいは〈関係の絶対性～大衆の原像〉

～2012年正月～ 永里記

ある事柄の渦中において、自分の認識が行き詰まるときにはいつも表題の言葉との出会いを受け止めなおしたいと感じている。

ほとんどの時間は黙って生活の瑣事に没頭しているが、ある関係的な場面で思索や発言や行動を強いられる時、自分の選んでいる特定の立場がいかにも必然的に感じられるとしても、その認識の位置をいったん問題の源泉からの偏差として捉えて見ることは不可欠である。言葉にならないで沈み込んでいる心のうねりのような状態に対して、自分の表現を開いて行こうとする試みは、様々な条件にしばられた特定の場面を、より本質的な場面に変換して行く条件であろう。

「プロレタリアート」といった外来の階級概念には、既に硬直的な印象しか持ち得なかった私（たち）にとって、〈大衆の原像〉という言葉は不思議な解放感をともなって交差していた。明確な実体概念ではない一種の詩的イメージであることにも関連していたし、資本主義の成熟にともない、能力を含む条件の差は歴然としているけれども、体制の枠内で個人の順応的な努力が時を得れば、貧困や差別の固定的な抑圧から脱することも可能となりえている社会への、漠然とした感受性も包括していた。

また、明確な目的意識や事実認識に貫かれているように見える人々の狭間であいまいに浮遊する自分が、なお矛盾を感知し、この世界のシステムと衝突せざるを得ない有り様と事柄を考えるさいに、欠くことのできない重量感を伴っていた。

時代は様々な矛盾を増幅しながら、大多数の生活基盤を全体的に底上げする方向を明示しており、20世紀初期段階から既に少数の思想家たちによって警告されていたように、古い階級闘争の理念は、そのままでは、国家的矛盾の上に、さらに別のくびきを上乘せする桎梏の役割しか持ち得ないことを世界規模の事例が写していた。

〈大衆の原像〉の情動的な発生根拠は〈前衛〉〈党派〉〈知識人〉といった往時の社会階層性に対応する基本概念であった。と同時に、誰もが内包する知性の根拠にとって直感的な了解圏を持ったのである。

〈反〉体制運動の本質領域において、1960年前後の安保闘争が〈戦後民主主義〉〈前衛〉〈党派〉といった概念に引き寄せらる知的階層性の「擬制の終焉」過程であるなら、その過程を折り畳むようにやってきた1970年前後の〈大学〉闘争は、〈知識人〉概念を貫いて、さらに言葉に関わる者の全存在様式に及ぶ「擬制の終焉」であったとすることができる。知性の根底的反省を含んだ〈69年性〉の問いは、世界同時発生という意味からも人類史における幻想性構造の変動を告げていた。闘争の一過性及び部分性を強調する社会的風潮は、根源に直面すれば人間を主体とする文明の方向性自体が迷宮に突入しかねないという秩序の恐怖感に根ざしている。

大衆的反乱の大波が過ぎた後、勤め人や起業家や研究者や～として「大清掃」スタイルから市民社会の服装にまぎれて行くさい、〈大衆の原像〉は内外から強いられる理不尽な屈折や倫理的なこだわりを解体する一種の〈やさしさ〉を響かせていた。「等身大の己に向かって歩い

ていくことが、情況の核心に向かうことでもあるよ」という〈歌〉として。各々の軌跡が背負った屈辱と責任を問い続ける複合的な声としても…。しかし、ある言葉が了解圏を広げる時は情況との切迫した関係が失われて行く時でもある。

国家を頂点とする秩序の構造に対し異議申立に立ち上がった層が社会の諸領域で中核を占めるようになると、時代は思想的にも飽和点に達した。ある者は、秩序を批判した方法を管理する側から下層の関係に逆転的に利用するようになり、ある者は、他者が避けようもなく持続している闘争に交差すると、思想家の成果を「〈大学〉闘争後責任」の問いに対する防壁とするようにもなった。

これらの者らが、例えば、松下（ら）に向ける疑義は異口同音に〈生活〉感（～観）の欠如ということに帰着する。つまりは「〈大衆の原像〉を繰り込んでいないお前らの闘争は情況的に無効だ」ということである。この時、思想的絶対条件として突き出される〈大衆の原像〉が都合良く潤色された自我意識の倒像にすぎないことに彼らは気付いていない。気付かないふりをしている。

〈正しいと思うことを主張するのはいい、しかしそれならば君たちはどうやって生活するのか？〉という権力性からの無言の設問と一瞬ごとにリアルな闘いを繰り広げている松下（ら）にとって、彼らの言う〈生活〉は極めて観念的であったし、事実、問いが自分の足下にも向けられていることを知ると、一度は共有しようとしたテーマ性を忌避する口実として機能させた。

こういった用語法を用いる者が、一定の生活水準を保障された比較的恵まれた知的階層に多いのは何か象徴的である。貧しい庶民の一人で〈門司大里教会〉の信者だった故菅原寅夫兄は、彼らの用語法を「富める者が献げうるのではない」と一言で批判した。お金であれ、知識であれ、体力であれ、所有はさらなる所有に循環する。生活の基軸は今持つものを〈献げうる〉契機に恵まれることである、と。

今日食うパン、明日家族に食わせるパンをどうするのかという問いを包括しないで行ける闘争現場は存在しない。〈生活〉を盾にしたがる者たちの本音は、現在手にしている（手にしそうな）生活の与件を、そのまま保障する〈闘争現場〉だけが関わるに値するということなのだ。獲得の努力は当然だが保障は成り立たない。

彼らは想像もしたくなかったろうが、食うとか住むとかいったのっぴきならない与件の過酷さを潜りながら、身体に潤いと豊かさをもたらす領域にも松下（ら）は十分に開かれていた。吾唯足を知り、幻想の広がりや深さを共闘させつつ、生活や職業への拘束のされ方を超えて存在しようとして黙って格闘していただけだ。

1980年代、幻想性を消費対象として統べる文化現象はその先行きの膨張を見通せる分水嶺に至る。話芸や映像やコミックやポップスといったエンタテインメント性を強調する分野の興隆が大衆の消費願望を刺激し続け、媒体機器を含む市場拡大は止まるところを知らなかった。もはや全ての文化領域は〈商品〉に一元化され、競争を勝ち抜いてくる幸運な担い手たちによって、欲望の型を注入、主導される。

テレビ映像に乗せられ、たえず生活に交差し続ける雑多な情報は、仮想現実の中に耳目の共和国を形成する。強制を意識しないで済む自らの〈大衆〉性の位置に自足の間を求めて人々はたたずみ、あるいは群がる。それは戦後過程の転換がもたらす文化的解放の側面でもあった。解放の重力場は資本の作用の枠内でねじれた幾層もの画一的な空間を生み出す。〈商品〉はいずれ提供者及び受容者総体の変容をも強いるであろうことが予測された。それが社会総体の次元を上げるのか下げるのか即断を許さなかったけれども。

この状況下で〈知識人〉に代わって迫真力を持ってくるのは、〈専門家〉という語のはらむ階層性であった。

サブカルチャーが学問芸術の成果を総合的に応用した〈商品〉化に向かうのとは反対に、権威に隣接するカルチャー領域は、系の増殖と細分化に向かい、〈大衆〉性に対して閉じた〈専門〉性を強化していく。文明要素は、国家の現実的要諦である軍事科学技術の維持発展力学と、資本の運動力学が相互作用しつつ、秀でた頭脳を組織するシステムを編成し、成果が小出しに濃縮もしくは拡散されながら社会や個人の生活領域に流れ下ってくる。この現実はずくまで人類史を閉じこめている。

思想家吉本隆明が、資本主義経済の次元超出を感受し、科学技術の進展が産業にもたらす変化と、マス化した人間的欲望（消費願望）の動向が人類史の鍵を握ったのを認識した時、あらゆる抑圧体制に対する〈反〉体制思想は、〈深〉体制思想に比重を移した大家の思想として現象するようになる。体制に内在する可能性の深〜進化を資本制社会の自然過程的發展と量質転換の法則的展開に期待し、〈大衆〉の希望を見るほかない思想の転移は、極めて頑強な基盤を秘めた〈保守〉思想家の誕生を意味した。

と言うより、〈革新〉を標榜する全ての知的営為は、〈大多数の生活〉を求心力とする大きな〈保守〉の部分性として資本の運動に呑み込まれ、自己完結的な各学問分野もその求心力によって各々の〈専門〉性の死活を規定される。一見、〈大衆〉社会の理想への階梯が実現したかのような様相の到来であった。

巨大な存在感を放つ思想が、思想の帰結としてたどる必然性を時代の流れに感受しながら、かつて「孤立した少数者を信ずる」と唱った思想詩人に支えられてきた読者の端くれは複雑な思いだった。真性の〈保守〉思想が存在しないかぎり、真性の〈革新〉思想も存在しないという意味において、能動的な意味を持つのだと思う反面、体制権力が同様の〈保守〉的論拠を背景に積み重ねる既成事実化の力に抗して現場に引き出される少数者の反抗は、背後からも思想的回路を塞がれているのと同じだ。

安堵したのは体制側ばかりではない。「〈大学〉闘争後責任」を過去に封印し、どこかに復帰したい知的階層がもっと安堵したのだ。〈革新〉的主観の外壁に〈保守〉の重厚な言語を持ったのである。

人目につかぬ何処かへ矛盾をしわ寄せすることで保たれる資本主義の成熟を背景に、何もしないでも勝つ権力の余裕は決定的となる。流れに即応する〈大衆〉性の岩盤にはじき返される反体制運動は自滅と退潮の一途をたどった。「自滅すべきものが自滅するのは良いことだ」と、大所から言えば、そうも言えるだろう。

流れを捉え〈大衆〉性への〈加担〉を確信する思想の語る全知性への中心テーゼは「各々の〈専門〉領域を深化せよ」ということである。深化を阻害するものとして、或る〈専門〉領域に別の領域の〈倫理〉が介入することが特に厳しく戒められる。そこには生活水準の底上げに対応する各分野の内在力の高度化～知的水準の原則的底上げが目されていた。辛抱強くその道をたどるより他に、権力のすげ替えに終始する人間社会の矛盾を止揚していく方法はないという〈確信〉と共に…。

あらゆる〈党派〉性に抗して「自己の足下を掘り下げよ」と告知してきた「自立の思想的拠点」は、秩序批判に向かう知性の統合力を分断し〈商品〉に統合可能な〈専門〉性をうながす資本制秩序のスローガンに表層で重なってしまう。

本質的には（人間を含む）自然の収奪と浪費の運動原理である資本の論理は、その自働運動の過程的内実に応じて、利便性に囲まれた〈生活〉幻想の方へ〈大衆〉を組織する必然性を持つ。人間エネルギーを効率よく推進力に転化する力学的要請から、あからさまな悲惨要因の除去と、消費循環を可能にする多数者の確保が至上命題である。よって、何らかの倫理に立脚する社会運動より理想に対して近距離にあると主流の合理主義者たちは考える。

しかし、資本の圧倒的な運動原理の支配下、既成事実化して行く文明の渦中で常に生み出されている犠牲と、犠牲を生み出す構造に知性は自らの〈専門〉性から他分野との関わりを通して、現在（原罪）と未来への責任を負っている。責任の検証と検証に基づく決定が〈大衆〉に開かれていく条件とは何か？それは〈大学〉闘争が掲げた問いの一つであった。

最近新聞で次のような地方版の記事を読んだ。

「リニア中央新幹線が通る可能性のある山深き里の自治会が住民に賛否を問えば、（賛成、反対、どちらでも構わない）に意見は3分されるだろう」という。土地買収のようなハードな経済問題がからまないかぎり、賛成意見は新幹線が通ることによる生活の利便性を歓迎する層、反対意見は環境の変化に懸念を抱く層、どちらでも構わないという立場は自分の直接利害以外には無関心な中間層を反映している。強固な生活の基盤からしか発想しないという意味で、「どちらでも構わない」層に〈大衆の原像〉を単純に当てはめれば、環境懸念を解消する階段を踏みながら利便性を強調し、「どちらでも構わない」層をまず賛成意見に取り込んでいくことが自治会の役割になる。これに補償金や土地買収の問題がからんでくると、住民の具体的な損得勘定への対応で問題はさらにこじれてくる。ただし、どちらの場合も賛成意見を増やす算段のみを自治会は強いられる。一度住民の頭越しに計画が動き出せば、事業そのものに関する原点からの〈大衆〉的検討は、言い訳の積み重ねにすぎず、推進の口実を補強する役割しか現実には残されていないからだ。

「国家的規模の事業計画は高度な技術的専門性を有するので、企業や学者や官僚の領分から流れ下ってくる結論にまかせるほかない。より多くの人々の生活水準の維持発展のために国家がらみで推進され、選挙を通じた国内の大多数の合意でなされるのだから、残るのは、関係住民の経済的利害の調整問題である。安く買い叩こうとする側に対して、具体的な補償を含む各個の利害を守ることが交渉の主軸になるべきで、環境問題等をからめる反対の論理は社会発展にとって反動的な党派的空論にすぎない」ということになる。

行政の末端が強いられる対応を背景に、住民はおおかた経済利害の問題に組織され、実際のプロセスは、事業の推進を積極的にか消極的にか許容する層と、事業に伴う現実的不安を自然環境保護といった理念性に集中させて立ち上がる層に分裂し相争う事態となる。最終的には政治過程を掌握する権力によって〈多数決〉原理を盾とする強引な決着に行き着く。

軍事核開発技術保持の本音を常にエネルギー問題の下に隠蔽してきたこの国の権力意志は、未知の段階に突き入った原発事故の後も、未曾有の自然災害を強調し、技術的・人的欠陥の補足可能性を強調することで、時間の経過に伴い、国民の不安が薄まるのをひたすら待っている。主力報道機関の自己調整（規制）的な〈バランス感覚〉にも支えられた権力意志の思惑や策動にかかわらず、先進国における先端技術の暴走は世界史を分ける〈戦争〉状態の露出にほかならない。しかも未だ〈戦後〉ではないのだ。

内在する〈大衆〉的責任と敗北を根底で共有する思想の声は、惨劇や不況や格差のきしみの底に沈んでいる。

各国の原発推進論は地球温暖化と資源枯渇問題を前面に据えているが、ここにも〈専門家〉による錯綜する大嘘の連鎖がある。〈環境〉は今や世界ビジネスの対象であり、資源は常に〈戦争〉の本音である。地球資源の浪費を伴う国家間の経済平準化が進む中で、深刻さをます環境問題の広がりにもっとも敏感に反応したのは先進諸国の権力と資本であった。支配技術や経済過程への取り込みは関連系のねじれを積極的に増殖している。このねじれをほぐすのは〈専門家〉の知性を結集しても容易ではないだろう。少なくとも、乱れ飛ぶ類似用語を、①支配の論理②専門性の流れ③〈大衆〉的動向、の3点から明確に区分して見るべきであり、総合的には、産業革命以来の加速的な物質文明に人間の幻想性が追いつき超え始めた人類史的段階の典型例として、〈科学〉や〈技術〉を含む全ての概念の捉えなおしと同時に対応すべきである。

一連の経済〈発展〉の中で、利便性や利害問題の声の大きさに押さえ込まれている別の〈声〉があるのではないかと？例えば「どうお金を積まれどう説得されてもこの場所を離れない」といった情念のようなものは、画一的な意味や価値に〈生活〉を逆占拠された世界においては、それ自体では説明不可能だからだ。可視的には〈0〉であったとしても、環境問題を前面に掲げる人の内奥や、お金への説得に流れる人々の本音にも響いている〈頑迷〉な時空性の〈声〉があるのではないかと？

「機会と条件があればどこにでも行く」という生活空間の選び方ばかりで世界が成り立っているのではない。むしろ目には見えない〈少数者〉の〈頑迷〉さが世界を底辺で支えている。この言い方が荒唐無稽に聞こえるなら、「何があっても東京に住み続ける…」東京〈原人〉吉本のことを思い出せばいい。あるいは、対極的な位置から「六甲の斜面を離れるわけにはいかない…」と言った〈アイヌ（人間）〉松下を思い出せばいい。〈そこ〉には「これこれの理由」では説明の尽くせない思想の来歴や闘争の深度がこめられているだろう。

また、共同性の領域において、強力な戦争遂行能力に直結する共同幻想＝国家形成を望まなかった為に歴史の深層に埋もれている〈文明〉の例を想起してみるべきである。これらの根底にあるのはけっして特殊な欲求の痕跡ではない。自然と人為に挟撃されながら、物理と幻想の緻密に絡み合った小さな場所に根を張って生き死にする存在様式は、表舞台に出て来ないだけだ。

聞き取り難い〈少数者〉の〈声〉を押し潰して平然と通過して行く〈大多数〉という幻想の側に加担する眼によっては、けっして見えない〈大衆の原像〉があるのではないか？全てを経済利害の平面にならして行く資本の駆るブルトナーの下で、「自然環境保護」といった権力も多用する〈理念〉的言語を介してしか自らの〈大衆〉性の根底的欲求を表現できない段階があるのではないか？

軍事基地の問題、原発の問題、巨大交通施設の問題、核廃棄物を含むゴミ処理や地域開発の問題等々然り。

より多くの人間が快適に生きていく条件を整備するという建前のもとに、弱い所弱い部分へと資本や国家の論理は食い込んでくる。原発が顕著な例だが「安全性に関わることは過疎の地方へ、効率性は都市へ。こうして全体の潤うシステムが進化するのだ」と。

この資本の論理は、強力に敷かれたレール上で住民相互の分裂を強い、培われた生の尊厳を破壊し、割の合わない産業化の末端に組織して行く。幻想にすぎない威信を現実過程に移植することで成り立つ歴代の権力は、人間と人間を分裂させることで強者になびく政治過程を独占し貫徹する。

群の動向を占う統計的数字の導入は支配にとって便利なものだ。確からしさの根拠を補強する。だが、大抵は支配にとってましな結果に傾く数字も逆転と背中合わせの危うい〈専門〉的視点に乗っかっている。いつ矛盾のつぼに群ごと落ちて不思議ではない。〈一匹の迷える子羊〉に注ぐ視点や対応の質が結局は群の運命に巡ってくる。

疾走する世相において、かつての言葉に散文的な説明を加えようとする時の「ただのなんでもない大衆」といった吉本の言い方には、初出の自己表出性の強度を指示性に向かって解体しようとする情念がこめられていたのだろう。知的世界を想定した時の「知識の空隙」とか、身体における「ダラッとしている部分」という言い方でも説明が試みられる。情況的な差異に言葉の射程を届かせようとする配慮は感じられたが、初発のダイナミズムは既に失われている。

現実＝関係という世界構造においては、どんな位置も取ることのない（ただのなんでもない）（空隙）（ダラッとしている部分）といった様相は、即時（自）的に実現される「ただのなんでもない～」＝{0}ではなく、有意味性を秘めた{ }であり、或る〈不〉可能な〈実体〉の想定ないし抽象であることを忘れてはならないだろう。言説次元の平面に抽象された言葉が、現実社会の立体的～N次元的关系の中で発せられる時には、発語の〈過程的内容〉は必ずや仮装性を帯びて現実に交差してくるのであり、否応もなく浮上する弱者の位置に対して権力的に閉じて現れることがしばしばあり得ることに注意深くありたい。

巨大科学技術の実体からもたらされた世界的事故によって、自然も人体も決定的な汚染にさらされていく中、以前からの発言を日経や週刊新潮で吉本が一貫するのは、〈大衆の原像〉を繰り返す思想の一貫性ではない。科学の学問的深化の問題、科学の成果を技術に応用する条件の問題、経済社会システムに利用するさいに波及する真の効率性・コスト・リスク・関連する一連の組織的腐敗構造等の諸問題を、最も権力性に曝される人々の位置を想定して検討せず、つまり渦中にある無数の東京〈原人〉的な〈声〉を捨象し、技術の進歩史観～発展段階論に一元化して、錯綜する系のいくつかを混同～発言してきた錯誤の一貫性にほかならない。

圧倒的な力で推進が強行される中、地元住民のみならず、数としては少数の科学者やジャーナリストから浮上する原発批判を、異常な恐怖心を煽る反動と一括して決めつけ、結果的に、産学官を貫流する原発推進構造を腐敗ぐるみ思想的に補完してきた〈加担〉の一貫性である。

科学研究は自己完結的な運動領域において後戻りできないとも言えるが、利用価値を至上とする資本制に吸収され、人間知性の運動としてバランスを失った研究（者）の解放は、それを支える社会の幻想的成熟度と両輪の関係にある。一方、科学的成果の社会活用～技術的・経済的利用は、常に立ち止まって〈大衆〉的に検討すべき高度な政治的テーマである。

ネットで読んだ週刊誌のインタビューによれば、彼が三・一一以後を敗戦後に対比して捉えていることが分かる。戦後の風潮に同調しない小林秀雄の態度を是とし、結果や感情や風潮にふれることのない思想的原則を貫くことが責任の取り方だと言いたいのも伝わってくる。根の生えた思想家個人としては当然の〈頑迷〉さであると言うことはできる。（自分は推進派でも反対派でもない）（倫理的な善悪の理屈はつけない）（技術論と文明論に則り思想的原則を述べる位置にいる）（経済的な利益から原発を推進したいという考えにも与しない）と主観的に思うのは個人の自由（恣意）に属する。しかし、一人の物書きの言説領域といえども、ましてその影響力の強度からも、〈関係の絶対性〉を超越している位置は存在しない。

どんな思想も単独者の頭蓋の奥に宿る。言葉を受け取る（思想家本人を含めた）者たちの咀嚼を経て日々の発言や認識に「具現」するはずである。しかし、いつも長すぎる「ダラッとした」状態をはい出て、乏しい理解力に煩悶しながら、吉本の成果の断片に依拠して発想することも多い己を省みて、自戒的に言うのであるが、この「具現」は生きた思想からの離反である場合がほとんどだと考えた方がいいのではないか。言葉の膂力が強ければ強いほど、受け取る側の自己変革を伴わない部分的な図式として伝搬する。都合良く取り込んだ概念や理念の一人歩きが、孤立的な闘いの現場に干渉し、権力性の補完として機能する例も目立つようになる。

投げ出される認識や発言が、各当事者の今ここの抜き差しならないテーマにとって、どのような包括的〈喩〉であり、より高次の〈現実〉に止揚されうる契機であるかという点に、思想及び現場双方の生命がかかっているのに…である。

個・対・共同といった幻想区分も、言葉が飛び交う現場の本質や発言者の立ち位置を含めた変換を潜らず、単に一般論～正論として上から振る舞うかぎり、自己弁護や居直りの道具になり、止揚に向かうべき関係をより硬化させる口実にもなる。社会的に認知される様々な体系も、一瞬のうちに生起して視界から消えてしまう断片的表現も、思想にとって、〈大衆〉にとって、新たな桎梏に転化しうるものだ。桎梏とは思考回路や生活維持に都合の悪い障壁と直ちにイコールではない。幻想性構造を貫く〈階級〉実体の構造に対して閉じてしまう仮象的自由の、抗しがたい重力性の謂いである。「頭を切り換えることによっては通過できない幻想」の深淵である。

単独の思索者として一人一人の読者に向き合うことで、社会的な意味に開かれていた著述家が、特権的な既存の文化領域で必要以上に担がれ祭り上げられる70年以後の風潮は、〈69年〉以前に回帰していく知的反動を写していた。本人は大家にまつり上げられるのは辛かったにちがいない（と思いたい）。敗北から跳び越しの高揚に向かう世相の狂騒が去った今も、言

葉の訴求力が問われる領域の隠然たる影響力は大きい。日経や週刊新潮がこの時期担ぎ出すのも、原発事故の責任を「知の巨人」の言葉によって相対化したい共同意志と不可分だろう。

「重層的非決定」という言葉が登場したのはいつの頃だったか？ そうなってしまう表現軌跡は薄々分かるように思えたものの、〈非〉の位置そのものが〈決定〉として情況の〈表層〉を流通してしまうことをどれほど対象化しているのかに疑問はふくらんでいった。

ただ一つ言えることは、事故後の発言によって、文筆家として往時の読者層への責任は果たしたのだ。視力の限界の一貫性をそれぞれのものとして公表するという意味において、思想に付着した威信を自ら破壊するという意味において。そうして初めて、彼が〈専門家〉として成しえたことの忌憚のない姿が、放射能をまき散らした私たち総体の敗北を文明的遺産として繋留して行くだろう。

「マチウ書試論」は、「現実＝関係の絶対性」を意志や恣意性に関わらず「関係として常になにものかであってしまう」人間の実存実体と不可分に突き出している。「ただのなんでもない」という形容は、そこで提示された現実においては成立しない。関係に包囲しつくされた実存の吹きさらしで、思想にとっての始まりと終わりを同時に規定してしまう根源的桎梏とも言うべき自己認識の過酷さに吉本はその時立ち止まっていた。関係こそが絶対であって、人間の自由意志が生存に伴う矛盾の止揚条件を絶対的に持っていないとすれば、一体自分たちの思索や運動にどういう意味があるのか？ 運命とか宿命とか呼び慣らされてきた場所に対置された自己認識の過酷さを前にして、ひたすら意識の根底に降りて行く沈黙〈～詩〉が鳴り続けていた。

垂直的～下降的な意識の行程がそれ以上降りられない限界線と交差するようにも「思想が思想を生き抜く」原点＝人間の基層の存在様式を〈大衆の原像〉という言葉で表現域に浮上させた時、自己の思索や運動の源泉をはっきり自覚し、この自覚は同時に、他者に対して閉じられて行く自己表出〈関係の絶対性〉を、現実認識の特異点からの転位モメントとして、あらゆる「絶対性」の止揚概念の根拠に着地させたのである（と私は受け取った）。

若き日の詩を通してかいま見る吉本の〈大衆の原像〉には、上空に動きを止めて無心に抒情を吸収している雲のようなイメージがあり、思想が思想の〈死〉として見定めた場所の乾いた充足感があった。また、己の内的対話世界の豊かな倒像としてもあっただろうし、思春期から青年期にかけて出会った私塾の教師や労働者たちの純化された生存のたたずまいが、知の還相すべき〈像〉を喚起していた。一方には、身近な生活利害からしかけっして発想しないリアルな現場の強固な岩盤の〈像〉があり、二重性の均衡として彼の〈大衆の原像〉は存在していた。

詩的表出は散文に移項しつつ指示性を強めて行く。批評の〈専門〉性を深める過程で、〈関係の絶対性〉を後年「関係の客観性」と言い換えて見せた時には、奥所で鳴り続けていた主調音が変調の時間域に入り込んで行くのが感じられた。善悪の判断を抜いて、事物を貫く関係を必然性という面で写しとるという当為であり、思想を具体的関係構造の〈外〉に仮構するということである。しかし、語られる思想であるかぎり全ては関係から（へ）の〈表現過程〉である。



一周して〔思想が思想の死の位置（正定聚）と定めた共同幻想＝大衆の原像〕という印象が私の内に渦巻いている。

〈大衆〉というくくりの質は、対応概念であった〈前衛〉〈党派〉〈知識人〉の社会的拡散に伴い、外皮を残して具体的現実には飛び散った。

くくりを拒否する個々の生存に共通項を想定するなら、生誕と死に挟まれた時間をそのまま〈詩〉とも言うべき空間性変換し返している像である。人間という種の下降限界は、生存の条件がそのまま〈詩〉の条件でもあるという薄明の位置に見出されるのではないか。

先程〈頑迷〉という言葉で言いたかったのも、生存の根拠に根をおろし、〈沈黙の核〉を形成している〈詩〉のことであった。

―苦痛を大きな調和に向って旋回させる待機の身振り、身体性の分裂の谷間を統一方向に働く幻想の芽生え、目先の必要を無視するほどに深まる飢餓感、愛とも言う共感心理に向かう基層の渴き、そのようにも言う不可視でありかつ不可避の、それぞれの実存が内包する〈表現過程〉一をである。

存在の内壁に反響している名付けがたい未解放の〈詩〉を聞き取り呼応するのが、〈大衆〉という語を発語する位置の〈詩〉であろう。

松下は、〈大学〉闘争を根底的に潜りながら、〈日本〉という知的風土の表舞台で〈専門家〉として闘わねばならなかった吉本の位置や苦闘の意味を深く受け止めていた。彼もまた知性によってはおおいつくせない幻想的な空隙や「まどろみ～」を愛した。むしろ、その位相で遠い夢をたぐるように生きたとも言うことができる。

しかし、仮装概念をかつて「存在の関数」と評した詩人に習って言えば、松下にとって〈大衆の原像〉とは、思想が自らを語るにさいして写し取る静止した像ではなく、絶えざる現場性において微分すべき運動像であった。〈関係の絶対性〉に向かつて相互に偏差して行く自他の、相対的でもあり過渡的でもある倒像として現前していた。

言葉を換えれば、存在条件と存在様式の矛盾を転倒して行く仮装的表現主体として、関係の〈現実〉に絶えず写像し換えされていたのであり、だからこそ、〈関係の絶対性〉とは存在と不可分の表現〈現場〉であり、〈不〉可能性の極限まで包囲～解体されるべき追及対象であった。

多くの〈専門〉的な造詣を尊重しつつも、状況から（へ）の声として、自らはあらゆる〈専門〉的な位置を忌避した60年の生涯は、一見、特殊な闘争現場～生活領域に限定されているようであるけれども、バラバラの時空に孤立している苦闘たちの連帯根拠と方向性を、未来的な〈今〉においていっそう提起し続ける軌跡である。